

草稿

百十四

一

本問文庫

文庫 14

A 31



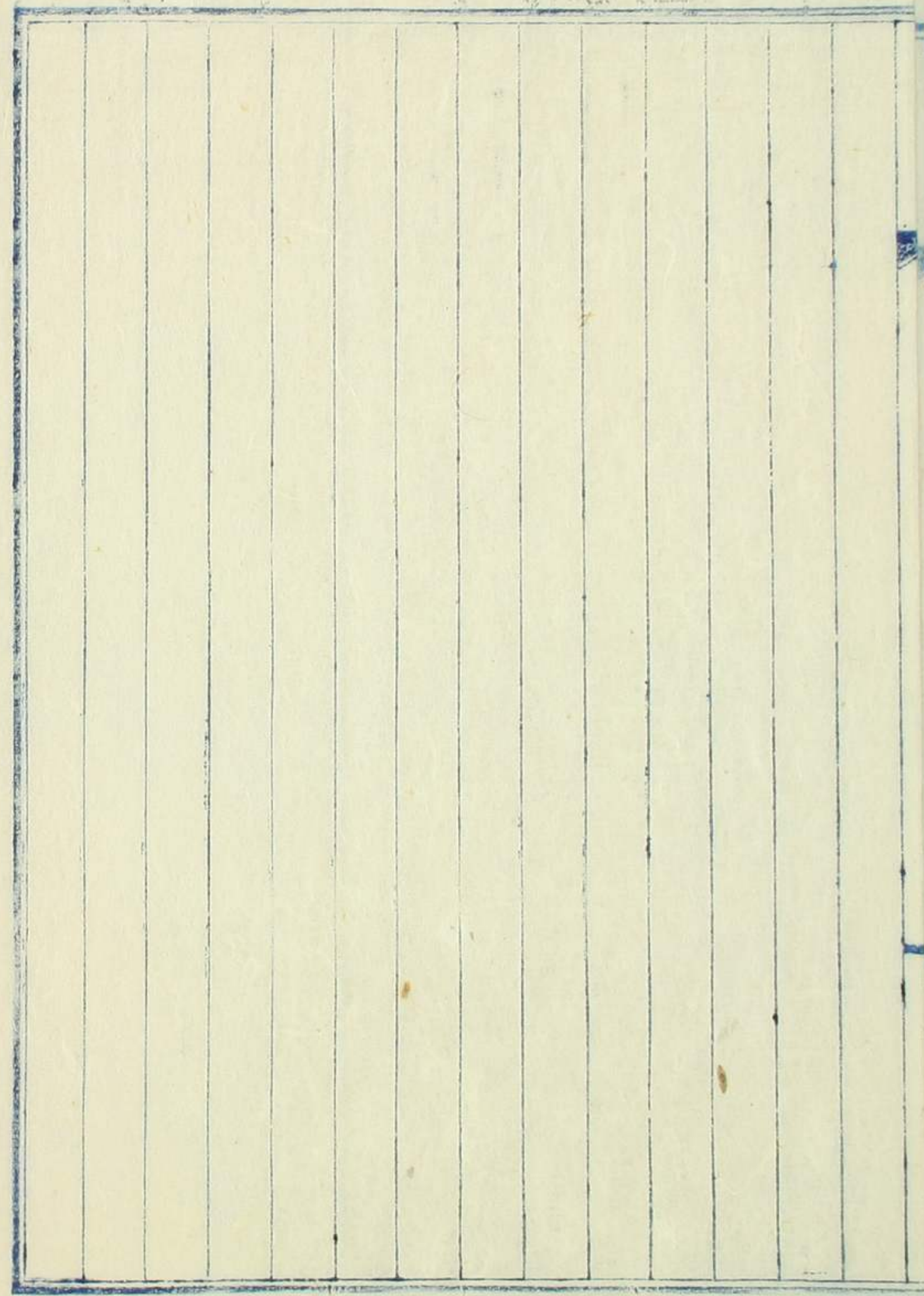
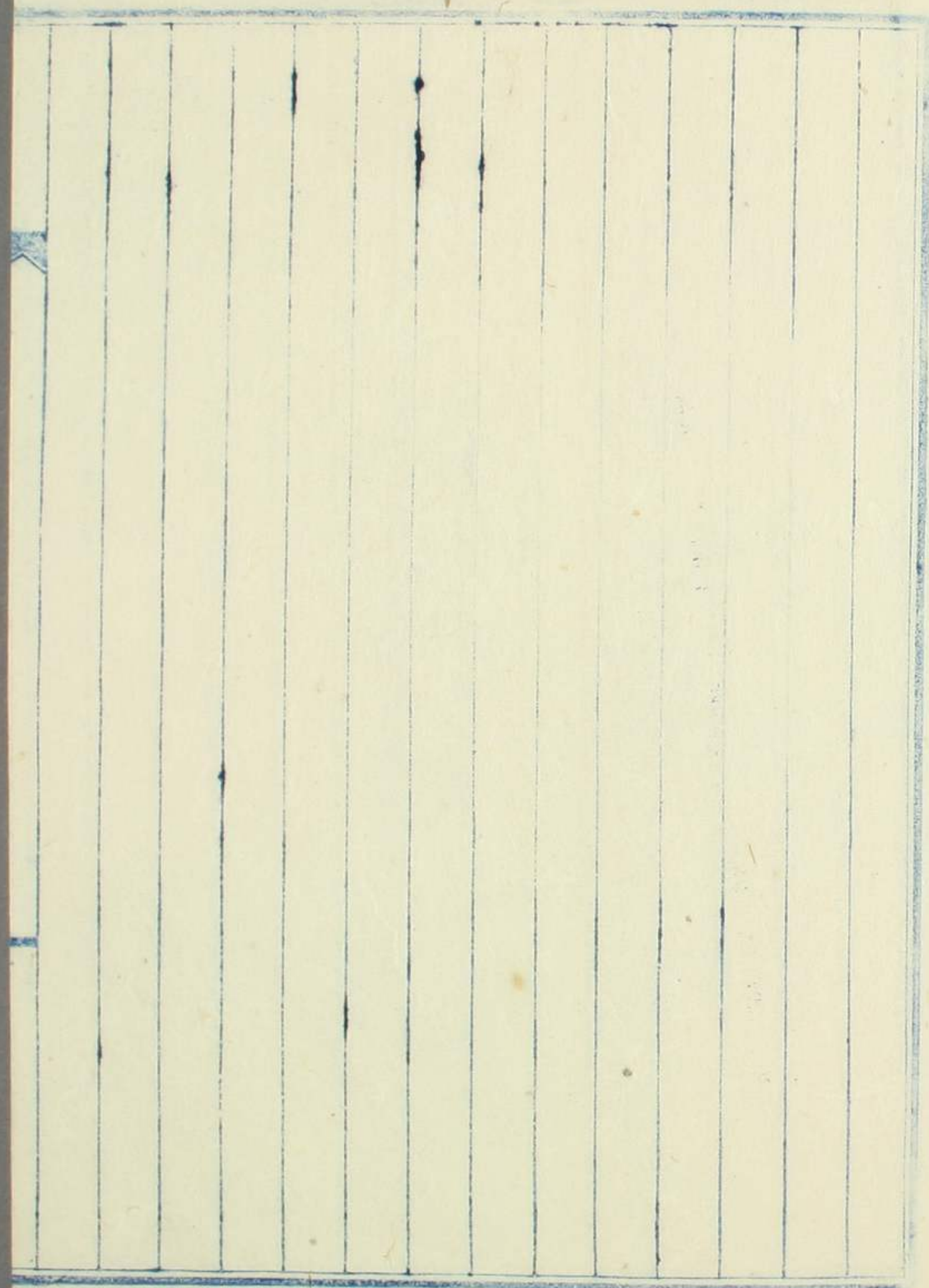


九月三十日

免角君が飯海は何時も儀傳の片多し、今在は又右珍らしき
和しの禮也。此の儀傳に記す、不忠笑は此記を法さる
可からし。

先づ昨日の事、大田を記す。朝友に送られ、新橋より
舟乗、増尾各名屋に上る。各名屋に上り、左に東見河
池に記す。大場は一歩し、西見河。

昨朝、名屋に記す。字極に上。井上初に、
前、併、河が故に、解り、有、り、の、故、あり、を、ら、せ、り、た、は、は、井、上、
た、原、を、記、し、し、止、め、せ、り、た、の、故、あり、を、ら、せ、り、た、は、は、井、上、
川。此、は、何、時、も、下、り、ま、り、せ、り、た、屋、を、記、す、場、也、と、す、り、
今日、手、前、に、記、す。一、部、也。西、見、井、上、と、記、す、の、故、あり、を、ら、せ、り、た、は、は、井、上、
の、故、あり、を、ら、せ、り、た、は、は、井、上、の、故、あり、を、ら、せ、り、た、は、は、井、上、



以下全て
白紙

